

～自治体職員の仕事の「質」をめぐる問題～

令和5年度地域政策研究センター 地域協働研究【ステージⅠ】採択課題

課題名：地方公務員の働き方と職務の質に関する研究—県内自治体間での比較を基に—

研究代表者：総合政策学部 役重眞喜子

課題提案者：滝沢市

研究メンバー：川嶋 陽（滝沢市）

技術キーワード：ワークエンゲイジメント、働き方、ブルシット・ジョブ

▼研究の概要

自治体職員の休職や早期離職の増加など疲弊感の高まりは深刻な問題となりつつある。本研究ではD.グレイバーが提唱したブルシット・ジョブ（完璧に無意味で不要で、有害でさえある仕事。以下「BSJ」）概念を手掛かりに、岩手県滝沢市を対象とした職員アンケートを行い、仕事の量だけではなく「質」に関する実態と課題を把握した。

▼研究の方法

先行研究※から、BSJは日本でも一定の広がりが見られ、特に自治体業務においては①二元代表制の下にある「政官関係」②集権的な融合関係にある「国・地方関係」という2つの視点から把握する必要が指摘されている。そこで、これに即したBSJの代理指標を設定した上で、滝沢市を事例にアンケート調査を行う。

【アンケート調査結果】

調査対象：会計年度任用職員を除く市職員

実施時期：2022年11～12月

回収状況：配布数 320枚 有効回答数 189枚

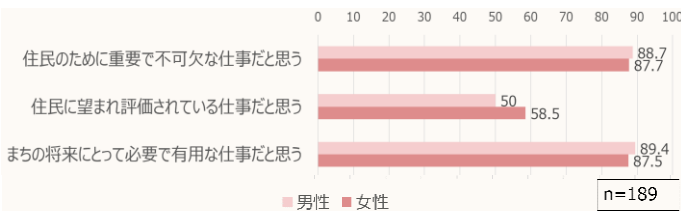
回答率 59.1%

属性：男性66% 女性34%

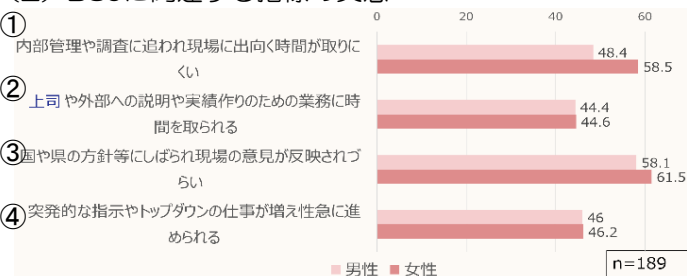
20代22% 30代28% 40代29%

50代19% 60代以上2%

(1) 仕事の有意味性について



(2) BSJに関連する指標の実態



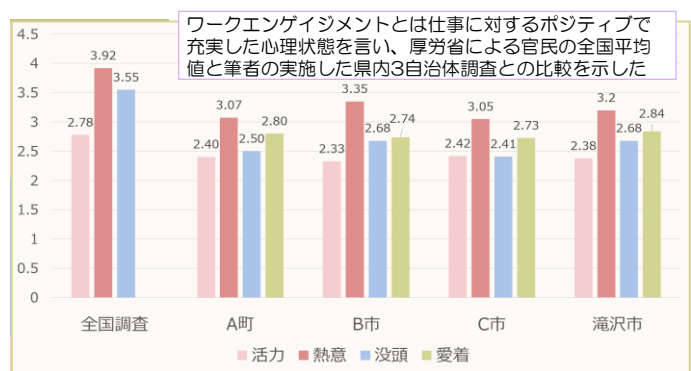
<参考文献>

D.グレイバー（2020）『ブルシット・ジョブ—クソどうでもいい仕事の理論』岩波書店
役重眞喜子（2023）「行政官僚制とブルシット・ジョブ論—その論点と課題—」公共政策学会2023年度研究会大会企画委員会セッションにおける報告
厚生労働省「令和元年版 労働経済の分析」

(3) 働き方と職場環境について



(4) ワークエンゲイジメントスコアの比較



【結果分析】

- 仕事の意味：約9割が評価⇔住民評価は低いと認識→自由記述では「やりがいはあるが保健師が少なすぎて多数の事務業務や突発的な対応が求められるため住民と（中略）十分に関わることができない」
- BSJの実態：国・地方関係に係わる指標①③が、政官関係に係わる②④よりも強く感受されている→自由記述では「国や県への報告事項、調査機関からの調査やアンケートも非常に増え（中略）資料作成に多くの時間や人員を割き、根幹となる業務が非常に遅滞している」などの意見が複数。
- 働き方と環境：人員の不足や効率的な業務環境、必要な研修などに関して不充足感が高い
- 働きがい：ワークエンゲイジメントの水準が早期離職が増えるとされる3.0を切るなど危険な水位

▼研究の成果と考察

特に国・地方関係に由来するBSJと人員不足から、住民へのきめ細かなケアや職員のワークエンゲイジメントの低下に影響を及ぼしている可能性が示唆された。要因の分析と改善策の早期検討が今後の課題である。

▼おわりに

今回のアンケート調査にご多忙の中ご協力いただいた滝沢市職員の皆様に心より感謝申し上げます。